

江戸城殿中刃傷における尾張家御城附の情報収集

白 根 孝 胤

はじめに

御三家御城附は、各大名家に設置されていた江戸御留守居役に相当する役職である。江戸御留守居役は幕府や諸大名との連絡や折衝を行うとともに、日常的に幕政・藩政の動静や世間で広まった風聞など様々な情報を収集していた。大名家によって呼称は異なり、聞番・聞役・公儀人・御城使などと呼ばれた。¹⁾御留守居役は江戸以外にも、京都・大坂の屋敷に置かれ、また、九州の大名家は長崎聞役を置き、長崎奉行からの連絡の取り次ぎや貿易品の調達、大名との情報交換を任務とした。²⁾

江戸御留守居役は江戸城本丸御殿に登城すると、表向の蘇

鉄之間に控えていたが、御三家御城附は毎日江戸城御殿に詰める特権を有しており、表向でも「奥」に近い位置に部屋を与えられた。³⁾そのため、老中をはじめとする諸役人との接触も緊密で、幕府の動向を迅速かつ正確に得ることが可能であった。

御三家御城附以外の江戸御留守居役は、他の大名家との間で情報交換を行うため、留守居組合を結成していた。組合には大名の殿席を基準とした同席組合、親類関係による近親組合、近隣の江戸屋敷で構成された近所組合などがあり、先例・旧格の問い合わせや政治情報をはじめとする共有すべき様々な情報の報知、幕府法令への対応などを協議する場となっていた。⁴⁾殿席が大廊下詰上之部屋であった御三家の場合は、「御三家御城附は別派」「諸藩の如く留守居付合といふはなさ

ず⁵」とあるように、御城附は毎日登城し、他の江戸御留守居役よりも幕府諸役人に接触する機会が多く、情報収集に尽力していたことから、留守居組合は結成されなかった。ただし、幕府からの法令や御達を申し渡す大目付廻状が江戸御留守居役に発給されたときは、御三家に通達されなかった案件についても御城附からの要請があれば、廻状を内覧してその情報を得ることができた。⁶

尾張徳川家の御城附は元和六年（一六二）に設置され、後に江戸城本丸御殿付と西丸御殿付に分掌した。定員は二、三名で役高は四石であった。当初は半年詰でその期間は合力米（足米）として五石が支給されたが、寛文七年（一六六七）より一年詰で合力米一石の支給に変更された。⁷

このように江戸御留守居役は、恒常的に幕府との折衝や諸大名との連携を図っていたが、幕府の権威や幕藩関係の根幹に関わる重大な事態に直面した場合は、正確な情報に基づき迅速な対応も求められていた。そこで本稿では、幕藩制的政治・儀礼秩序を維持する空間であった江戸城殿中を揺るがした刃傷事件において、尾張家御城附がどのように情報を収集し、事態に対応していったのか、その実態について検討して

いきたい。

一 赤穂事件における尾張家御城附の動向

元禄十四年（一七一）正月十四日、尾張徳川家（以下、尾張家と記す）は高家肝煎吉良上野介義央に対して、例年通り朝廷への年頭祝儀物の献上を依頼した。毎年、高家肝煎は年頭御礼の將軍名代として上京することになっており、その際諸大名は高家を通じて天皇や女院等に年頭祝儀物を献上していた。このとき尾張家は、東山天皇に太刀一腰・黄金一枚、靈元上皇に太刀一腰・白銀五枚、女院・准后・女御にそれぞれ白銀五枚ずつを献上している。⁸ また、前年十二月までに幕府から諸大夫成を許可された大名家は、官位叙任を命じた老中奉書（「口宣之奉書」）や姓名書とともに官金を添えて朝廷への叙任手続きを高家肝煎に依頼した。高家肝煎が持参した老中奉書・姓名書等は武家伝奏を介して内覧を受けたうえで、朝廷から位記・口宣案が発給された。今回尾張家では、「万石以上」格の重臣渡辺定綱が従五位下飛騨守に叙任されることになり、幕府から御城附に申し渡されていた。官位叙任の

手続きは御城附の重要な職務の一つであった。そこで、「渡辺飛騨守諸大夫就被仰付候口宣之奉書相渡候ハ、京都^江之御使吉良上野介^江跡々之通御頼被遊度旨秋元但馬守^江御城附を以為御達有之」と、参内する吉良義央に叙任手続きを依頼するために御城附を通じて老中秋元喬知に執りなしてもらうように願っている。⁹ 渡辺定綱の位記と口宣案は、吉良義央が江戸に戻った二月十五日に義央の屋敷に向いて受領している。なお、大名家臣への官位叙任は例外的で、御三家と徳川家門、加賀前田家のみに認められていた。¹⁰

毎年三月になると、朝廷から年頭祝儀の返礼として勅使・院使が派遣された。このときは同年三月十一日に勅使柳原資廉・高野保春、院使清閑寺熙定が江戸に下向し、五代將軍綱吉に拜謁した。殿中儀礼の最終日となる三月十四日は、江戸城本丸御殿の御白書院で將軍綱吉が両使に勅答する予定であった。ところが勅使馳走役を勤めていた播磨国赤穂藩主浅野内匠頭長矩が吉良義央を江戸城本丸松之廊下で斬りつける事件が起こった。幕府はこれを喧嘩と認定せず、浅野長矩は愛宕下の一閑藩主田村建頭の屋敷に預けられ、即日切腹となり、赤穂浅野家は改易となった。

この殿中刃傷が直接尾張家の行く末に影響を及ぼすことはなかったが、浅野家とは縁戚関係にあり、決して無関係とは言えなかった。初代当主徳川義直（家康の九男）が浅野幸長（紀伊国和歌山城主）の二女春姫と婚姻したのをはじめ、二代当主光友の代には、三女貴姫が浅野綱長（安芸国広島藩主）の正室となり、その息女は尾張家の分家である梁川松平家当主義方と婚姻した。また、光友の養女園姫は分家の備前国三次浅野家の二代当主長照の正室となった。長矩の正室瑤泉院（阿久里）は長照の妹で、改易により三次浅野家の江戸下屋敷に引き取られた。¹¹

元禄十五年十二月十四日、大石内蔵助良雄をはじめとする元赤穂浅野家家臣たちが本所松坂町の吉良邸に討ち入ったが、その浪士のなかには実父が尾張家に仕えていた者もいた。浅野長矩の用人を勤めていた片岡源五右衛門高房である。片岡源五右衛門は尾張家家臣熊井重次の二男で、七歳のときに重次の従妹の夫にあたる赤穂浅野家家臣片岡六左衛門の養子となった。当主浅野長矩に重用され、用人として三五石を拝領した。浅野長矩による殿中刃傷の際には、江戸詰であったために国元に居た家老大石内蔵助良雄に急報し、長矩の切腹

後はその遺体を受け取り、泉岳寺で落髪している。熊井家は源五右衛門の祖父藤兵衛の代から浅野家に仕えていたが、実父重次は春姫が徳川義直のもとに輿入れする際に随行した。重次の妻も春姫の年寄として仕えた。春姫の死後、重次は遺命により尾張家家臣として留まり、義直の嫡子光友（のち二代当主）付の小姓や御供番を勤めた。¹⁷⁾

片岡源五右衛門の吉良邸討ち入りは義拳として名古屋城下でも大いに評判となったが、その一方で処分は実家の熊井家にも及んだ。討ち入り後、幕府は浪士たちの遺児に遠島を命じ、親戚には閉門・遠慮を申し渡した。ただし縁者の方から閉門・遠慮を申し出て、幕府を憚った大名家が処分を講じる場合も見られた。同年十二月二十日、実父熊井重次は「遠慮」を申し渡され、従兄弟にあたる中根清大夫は自ら「遠慮」の意志を示している。¹⁸⁾

尾張家が編纂した「御日記」によると、左記の通り、その後の熊井家の処遇をめぐる御城附の動向が窺える。

浅野内匠頭家来片岡源五右衛門、先達^而御預ケ之節、御家中之内右近親之者為御達之上、遠慮被仰付置候処、今度源五右衛門御仕置被仰付候^而付、右近親之者如何可被

仰付哉、秋元但馬守宅^江御城附被遣、為御伺有之候処、先是迄之通、遠慮被仰付置候様、御家老^江可相達旨申聞之。¹⁹⁾

片岡源五右衛門は討ち入り後、細川家（肥後国熊本藩）に御預けとなり、その間は熊井家や親戚に「遠慮」を申し渡したが、元禄十六年二月四日に幕府の裁定で源五右衛門に切腹が命じられたことにより、その後近親者への処遇をどのように取り計らうべきか、御城附を老中秋元喬知のもとに遣わして問い合わせていることが確認できる。この伺いに対する老中の返答は、源五右衛門の切腹後も、引き続き「遠慮」を命じるというものであった。しかし、二月二十三日には「此度御仕置被仰付候浅野内匠頭家来片岡源五右衛門近親之者未遠慮被仰付置候ハ、御差免被遊候様、御家老^江可相達旨、秋元但馬守御城附^江被申聞之¹⁹⁾」とあるように、老中秋元喬知は御城附に対して熊井重次や中根清大夫をはじめとする親族への「遠慮」を解除することを申し渡している。幕府を揺るがした赤穂事件に関わる家臣の処遇において、尾張家では御城附を通じて幕府の意向に即した慎重な対応がとられていたといえよう。

二 殿中刃傷と尾張家御城附の情報収集

(一) 田沼意知刺殺時における尾張家御城附の動向

江戸城における殿中刃傷は、寛永期から文政期にかけて九件確認できる。¹⁶⁾ 浅野長矩による刃傷から八 年余り後の天明四年(一七八四)三月二十四日には、老中田沼意次の長男で若年寄の田沼意知が、新番組佐野善左衛門政言に斬り付けられるという事件が起こった。田沼意次が幕政を掌握し、改革政治を展開していた最中に起きた殿中刃傷事件である。

尾張家の江戸城本丸御城附であつた坂野逸平治は、早速殿中刃傷の様子を在府の九代当主徳川宗睦に報告した。宗睦は三月十一日に市谷の江戸上屋敷に到着し、十五日に参府御礼のため、十代將軍家治に拝謁したばかりであつた。坂野逸平治は目付などを歴任し、安永八年(一七七九)五月より本丸御城附を勤めていた。尾張家に報告されたこの殿中刃傷事件に関する書付や書状、本丸御城附坂野逸平治が幕府から受け取った「御城書」の一部は、「万石以上」年寄(家老)を勤めていた石河家によって書き留められた。この留帳の内題に

は、「天明四年辰三月廿四日、於殿中新御番佐野善左衛門致乱心、若年寄田沼山城守殿^江手疵為負候右始末之書拔」と記されており、「田沼佐野刃傷之一件、附諸色評判記」などと合綴されて現存している。¹⁷⁾ 殿中刃傷の経緯をまとめた神沢杜口の「翁草」や「當中刃傷記」¹⁸⁾に記されている内容と重複している箇所も多いが、当時尾張家がこの殿中刃傷を把握するうえで、御城附を通じてどのような情報収集を行っていたのかを知ることができる。

この留帳の最初には、殿中刃傷が起きた翌日の天明四年三月二十五日付で、本丸御城附坂野逸平治が九代当主宗睦に提出した書付の写しが記されている。

御城附差出候書付

昨廿四日、若年寄衆同道^而退出之節、蜷川相模守殿組新御番佐野善左衛門方御番所^方罷出、田沼山城守殿^江切懸候処、山城守殿脇差鞘之俛^而受被申候由、手疵四ヶ所^而何れも疵あさ手之由、其内後之疵四寸計^二相見申候、右場所中之御間^与申御座敷にて御座候、然処、善左衛門方柱^江切付被申、少々手間取申内^三山城守殿暫脇^江開^レ牛被申候、善左衛門方跡^方追懸行候所を大御目付松平^対馬守殿

組留被申候由、其内御目付衆一兩人懸付被申、脇差もき取被申候、山城守殿下部屋^江三阿弥^三手を引かれ被相越候由、夫方駕籠^三主殿頭殿屋敷^江引取被申旨、善左衛門方^三八乱心之様子^三町奉行曲淵甲斐守殿^江御渡御座候^而、揚家^江被參候由御座候、色々風聞御座候得共、慥成儀八未相分り不申候、

三月廿五日⁽¹⁹⁾

三月二十四日、通常の役務を終えた若年寄田沼意知は、他の同役（若年寄酒井忠休・米倉昌晴・太田資愛）とともに御用部屋を退出し、新番所前廊下を通じて中之間の方へ向かった。すると新番組の詰所から出てきた蜷川親文組所属の新番佐野善左衛門政言が斬りかかってきたので、田沼意知は鞘に入ったままの脇差で刀を受けた。その際に手に四か所傷を負い、いずれも浅手であったというが、「後之疵」は四寸にも及んでいた。佐野善左衛門が柱にも斬り付けて手間取っていると、騒ぎを知った大目付松平忠郷が急ぎ駆けつけて善左衛門を取り押さえ、後から駆けつけた目付が脇差を取り上げた。傷を負った意知は、同朋衆の奥山三阿弥に介抱されながら下部屋に避難し、治療を受けた後、駕籠に乗って父意

次の屋敷（神田橋内）に引き取られた。善左衛門は乱心の様子で、江戸北町奉行曲淵景漸の役宅に引き取られ、その後揚座敷に収容された。以上がこの書付の内容であるが、最後に御城附の坂野逸平治は色々風聞が飛び交っている、正確なことはまだわからないとも述べている。

翌々日（三月二十六日）になると、本丸御城附坂野逸平治の情報収集活動によって、殿中刃傷の詳細が明らかになってきた。その内容は文書の記録・管理を担当する尾張家の留書奉行が認めた左記の書状から窺うことができる。

留書奉行通用手紙写

以手紙致啓上候、田沼山城守殿一昨廿四日於

御城不慮之一件、昨日之御城書^三相見候外、委細之儀坂野逸平治^江承合申候^二處、委儀八不相知、御場所も奥之事^三付、御城附坏不存所^三候故、変事之御場所絵図^三いたし貰ひ候由^三みせ申候^二付、於其許御沙汰も御座候節之為、別紙之通各様迄致進達候、御城書^三相見候通、松平対馬守殿、佐野善左衛門殿組留られ候節、後^江なぐられ候様子に付、袴小袖共膝之辺切れ候得共、怪我八不被致候由^三御座候、善左衛門殿蘇鉄之間溜部屋^江入被置附添被居

候、御歩行目付衆対談之様子随分正氣之様子^三善左衛門殿事妻子八無之、両親八有之候付、今般之御吟味^二付、父隱居御呼出も可有之哉と此義案思られ候、其身八如何様被仰付候共、土貢無御座旨被申候由、御歩行目付衆咄之趣、逸平治咄^三御座候、

一山城守殿手疵^一血大分出候付、余程剪れも有之由無^二心元沙汰之由、逸平治咄^三御座候、此等之趣為御承知申進候、以上、

三月廿六日⁽²⁰⁾

尾張家では殿中刃傷に関して、昨日(三月二十五日)付の「御城書」に記載された以外の情報収集を本丸御城附坂野逸平治に命じていた。「御城書」とは、「殿中御沙汰書」のこと、將軍への拜謁、諸役人の任免、法令の發布、大目付からの触書、三奉行の裁決、諸大名からの届書など、その日に起こった案件を書き留めた幕府側の記録である。「殿中御沙汰書」は、幕府奥右筆から御用部屋坊主に渡されて、御沙汰書掛の表坊主が筆写し、これを御城附は毎日表坊主から授受していた。そして、御城附が持参した「御城書」は、尾張家当主が在府の時はそれを閲覧し、年寄衆の披見も終わると留書

奉行に渡されて筆写した。これを「御城帳」と称した。「御城帳」を作成し終えたと、「御城書」は御城附に返却された。「御城書」は嚴封のうえ、国元に送られ、在国の年寄衆も内覧し、その後保管された⁽²¹⁾。

本丸御城附坂野逸平治は、今回の殿中刃傷が「奥」の空間で起きており、御城附も不案内の場所であつたので、刃傷が起きた場所を記した絵図をもらい受け、これを尾張家に提出している。老中や若年寄が執務する御用部屋は、表向と奥との境に設置されており、ここから退出する際には、中之間から殿中の警備を担当していた新番組の詰番所前の廊下を通ることになつていた。新番組佐野善左衛門が若年寄田沼意知に斬りかつたのは、まさにこの場所であつた。逃れる意知をさらに追いかけて再び斬りつけたのが桔梗之間であり、大目付松平忠郷が善左衛門を取り押さえた場所でもある。その際に忠郷は殴られ、袴や小袖が膝の辺りまで切れたが怪我はなかったと記されている。忠郷に取り押さえられた善左衛門は、蘇鉄之間溜り部屋に連行され、徒目付衆の監視下におかれたが、御城附の坂野逸平治は、その時の善左衛門の様子を徒目付衆から聞き出していた。それによると、善左衛門は殿中刃

傷を起こしたとは思えないほど正気の様子であり、自分の両親は健在なので、吟味の際にすでに隠居している父伝右衛門政豊が呼び出されるかもしれないことを非常に案じていたという。二十四日の書付に善左衛門は「乱心」と記されているが、実際はそうではなかった様子が確認できる。

一方、田沼意知については、坂野逸平治が聞いた話によると、手傷から大量に出血していたという。「翁草」「當中刃傷記」「田沼佐野刃傷之一件」によると、意知の傷は、肩一か所・背中三か所・股二か所に及んでおり、最初肩先に長さ三寸、深さ七分ほどの傷を負ったが、桔梗之間で再び斬りつけられたときには、股の傷が長さは四寸、深さは骨に達するほどで、かなりの重傷であった。

(二)「御城書」にみる佐野善左衛門の切腹と諸役人の処分
天明四年四月二日、若年寄田沼意知は父意次の看病のいかにもなく、三六歳で死去した。これにともない、翌日に佐野善左衛門政言は切腹を命じられた。このとき、尾張家の「万石以上」年寄石河光篤は、本丸御城附坂野逸平治が幕府から受け取った四月四日付の「御城書」のうち、切腹の様子を記録

した部分を書き抜いている。

御城書之内

一 昨三日、於評定所大御目付大屋遠江守殿、町奉行曲淵甲斐守殿、御目付山川下総守殿被立合被申渡候趣、

佐野善左衛門

去月廿四日於 殿中田沼山城守^江手疵^与為負候、雖乱心^与山城守右手疵^而依相果候切腹被仰付者也、

四月三日

右申渡相済、夫^江揚屋庭^而切腹^二付、為検使山川下総守殿被相越候由御座候

一 右之通、為検使御目付山川下総守殿揚り屋^江被相越候付、御徒士目付八木岡政七、尾本藤右衛門罷越候、

一 右之次第承合候処、於評定所被仰渡相済候^与否、佐野善左衛門牢屋敷^江駕籠^而町与力^并同心等附添、夫^江揚屋庭^二置二疊敷、御徒士目付^江町与力^江時分宜候旨案内致、善左衛門麻上下着用、石畳之上^三着座、此時検使御目付下総守殿麻上下^而揚座敷正面^三着座、其時介錯人曲淵甲斐守殿組同心高木伊助、善左衛門^江挨拶致候、添介錯人式人善左衛門を着座為致、身拵を取放、肌をぬかせ候否、

善左衛門腰之物^与申候時、三方^三九寸五分半分過紙^而巻候ヲ載、善左衛門居候前二尺隔置之、其時善左衛門右三方^江手を懸候処介錯仕候、首少々続候由、其時添介錯人首を上ケ検使^江為見候之上、御徒士目付共下総守殿被見届候^与申之、相濟^而直^三評定所^江下総守殿被罷出、遠江守殿、甲斐守殿一同^三新御番衆^江切腹相濟候趣被申渡相濟候由^三御座候、

(以下略)⁽²²⁾

四月三日、評定所での吟味の結果、大目付大屋明薫・町奉行曲淵景漸・目付山川貞幹の三名は佐野善左衛門に対し、乱心して殿中において田沼意知に深手を負わせ死亡させた罪により切腹を申し渡した。善左衛門は、町与力ならびに同心に付き添われて駕籠で牢屋敷に連れられ、その屋敷の庭に入った。庭には畳二畳が敷かれていた。そして、検使を勤める目付山川貞幹の指示により、徒目付が町与力に命じて、善左衛門を石畳の上に着座させた。このとき麻上下を着用した検使の山川貞幹は揚座敷正面に着座していた。介錯人の曲淵景漸組同心高木伊助が善左衛門に挨拶して背後に控えると、添介錯人二名が善左衛門を畳の上に着座させ、肩衣を剥いで肌を

脱がせた。すると、三方に半分ほど紙で包んだ短刀(九寸五分)が善左衛門の前に置かれた。これを善左衛門が手に取ったところで、高木伊助が介錯した。このとき首はまだ少々つながっており、添介錯人がその首を上げると、山川貞幹と徒目付は見届けた旨を申し述べて退散した。その後直ちに目付山川貞幹は大目付大屋明薫・町奉行曲淵景漸とともに評定所に出座し、月番老中松平康福に善左衛門の切腹が済んだ旨を報告するとともに、そのことを善左衛門と同役であった新番組衆にも申し渡した。なお、善左衛門が案じていた家族への処分については、父伝右衛門政豊、母かよ、妻とよをはじめとする親族いずれも「御構無之」となった。⁽²³⁾

切腹後、佐野善左衛門の遺体は、江戸浅草の徳本寺に葬られたが、「御用可立惜き人を不慮成事にて及切腹候事と、誠に天下挙て、佐野氏之死を惜しむ事なり」と、善左衛門への同情が集まり、墓には多くの庶民が参詣した。老中田沼意次による重商主義政策に陰りが見え始め、それに不満をもつ人々は善左衛門を「世直し大明神」と崇めるようになっていた。

天保十二年(一八四一)に尾張家十二代当主徳川斉荘の参府に随行した陪臣で随筆家の小寺玉晁は、同年七月十六日に徳

本寺を参詣しているが、そのときも「佐野善左衛門墓」大幟小幟に佐野大明神或は世直し大明神と相印、佐野の墓へかのぼり建参詣する事おびたし、其外色々の菓子杯をそなへ男女の差別なくおし合へし合⁽²⁵⁾」の状況であつたと記録している。

殿中刃傷の発生時、御用部屋・中之間・新番所など周辺の各部屋には多くの諸役人が詰めていたが、事態をいち早く察知し、体を張って佐野善左衛門を取り押さえたのは、老齡の大目付松平忠郷であつた。その功により忠郷は、上野国新田郡内において二石を加増された。しかし、他の諸役人は躊躇して対応が遅れ、そのことが、田沼意知を絶命させてしまった要因であるとし、処分が申し渡された。四月八日付の「御城書」によると、処分は意知と同役の若年寄酒井忠休・太田資愛・米倉昌晴をはじめ、大目付・目付・町奉行・勘定奉行・作事奉行・普請奉行・新番頭などに及び、出仕停止、御目通り差し控えとなつた。また、善左衛門の同役であつた新番蜷川親文組所属の万年頼豊・猪飼正胤・田澤正斯・白井利庸には、直ちに善左衛門を追いかけていれば取り押さえることが可能であつたにもかかわらず、善左衛門が中之間の方

に出ていつた際に引き止めなかつたことは不埒であるとし、罷免のうえ小普請入りを命じている。これにより、非常時における諸役人の対応を改善する必要が生じた。そこで、老中久世広明は、大目付・目付を通じて殿中に詰める諸役人に左記の御達を申し渡した。

久世大和守殿方大御目付衆・御目付衆御達有之、御殿中左之通被相触候由、

此度佐野善左衛門事、於殿中致乱心候儀、不平生様子前以相番等心当り之事も有之事二候、向後八相番等相互二心附ケ、少も不常様子之者有之候ハ、早速無遠慮引込せ、養生為致候様專一可致候、

右之趣、諸御番方且組支配有之、其外相達可然向々^江不洩様可被達置候、

四月十六日⁽²⁷⁾

その内容は、「佐野善左衛門が乱心して刃傷に及んだことについて、相役の新番は以前から善左衛門の不審な言動に心当たりがあつたはずである。今後は相役同士で心かけ、少しでも尋常でない様子が見受けられた者は早々に出仕を控え、養生させることが肝要である」というものであつた。この御

達の本丸御城附坂野逸平治が受け取った「御城書」にも記されている。「万石以上」年寄石河光壽は「御城書」を披見する際に江戸城殿中における諸役人の動向を知るうえでの重要事項としてこの部分を書き留めたのである。

おわりに

江戸城殿中での刃傷が生じた際、毎日登城して詰所で職務を遂行することを許されていた尾張家御城附は、早急に幕府の諸役人に接触して情報収集を行い、随時市谷の江戸上屋敷に状況を報告した。赤穂事件の際には吉良邸に打ち入った片岡源五右衛門高房の実家熊井家が尾張家家臣であつたため、幕府の方針に違わないように親族への処分をめぐって老中と折衝している。また、宝暦・天明期に老中田沼意次による改革が推進されるなかで、長男で若年寄の田沼意知への殿中刃傷が起きると、御城附は殿中御沙汰書（御城書）で状況を報告するとともに、御城附自身が幕府関係者に接触して事件の詳細や幕府の対応を直接聞き出していた。注目すべきは、これらの情報を「万石以上」年寄として尾張藩政の中枢を担っ

ていた石河家が独自に書き抜いて記録に残していることである。この留帳の奥書には「右八御城書」出候趣、又八御城附方内々申越候儀共、公義之事故猥々他見難相成、内々可遂他見、読候ハ、早速戻し可申事、尤写取候儀致間敷候事」と記されており、本来は他見無用であり、もし内々に拝見した場合でも早急に返却し、筆写してはならないと注意を喚起している。この留帳から若年寄田沼意知刺殺をめぐる幕府の対応のなかで、当時尾張家がどのような情報を重視していたのか確認することができる。

石河家は「万石以上」格として代々年寄を勤める家柄で、江戸詰となる機会も多かった。そのため御城附が幕府から授受した「御城書」を披見する際に、藩政の遂行や幕藩間交渉に関わる先例照会、情報収集のため、必要と思われる案件を書き抜いて手元に置いていたと考えられる。本稿で検討した他にも石河家が筆写した「御城書書拔」や「御城帳書拔」は現存しており、幕藩関係や大名間関係の推移や特質を分析するうえでの有効な史料群となり得るであろう。

註

- (1) 服藤弘司『大名留守居の研究 幕藩体制国家の法と権力』(創文社、一九八四年)、山本博文『江戸お留守居役の日記』(読売新聞社、一九九一年)、笠谷和比古『江戸御留守居役近世の外交官』(歴史文化ライブラリー八九、吉川弘文館、二一年)。
- (2) 泉正人『藩世界と大坂 天保期岡山藩大坂留守居を中心に』(岡山藩研究会編『藩世界と近世社会』、岩田書院、二一年)、山本博文『長崎開役日記 幕末の情報戦争』(ちくま新書、一九九九年)。
- (3) 深井雅海『図解・江戸城をよむ』(原書房、一九九七年)。
- (4) 笠谷和比古『大名留守居組合の制度的考察』(『史林』六五巻五号、一九八二年、『近世武家社会の政治構造』、吉川弘文館、一九九三年に所収)。
- (5) 『南紀徳川史』、服藤氏前掲書。
- (6) 拙稿『尾張藩における幕藩間交渉と城附・「取持」』(岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第二篇、二一年、清文堂出版)。
- (7) 前掲拙稿『尾張藩における幕藩間交渉と城附・「取持」参照。『御家御日記』(徳川林政史研究所蔵)、寛文七年二月二十一日条。
- (8) 『公边御日記』(徳川林政史研究所蔵) 元禄十四年正月十四日条。
- (9) 『公边御日記』 元禄十四年正月六日条。
- (10) 尾張家臣の官位叙任については、拙稿『近世大名家臣の官位叙任と幕藩権力』(徳川林政史研究所『研究紀要』第三九号、二一年)、同『尾張家年寄の官位叙任過程と公武関係』(岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第五篇、清文堂出版、二一年)を参照。尾張家の家臣で諸大夫成を許されたのは、年寄(家老)のうち、「万石以上」「諸大夫」の家格を保有する家柄に限られ、原則として六名の定員のなかで叙任された。なお、徳川家門大名・加賀前田家臣の官位叙任に関する研究には、佐藤孝之『加賀藩年寄の叙爵をめぐる』(橋本政宣編『近世武家官位の研究』、続群書類完成会、一九九九年)、内野豊大『越前松平家・加賀前田家の家格と陪臣叙爵について』(『中央史学』第二十七号、二一年、四年)、清水聡『元禄期加賀前田家における諸大夫家臣の再興とその意義』(『地方史研究』第三四四号、二一年)などがある。
- (11) 拙稿『御三家における縁戚関係の形成と江戸屋敷』(徳川林政史研究所『研究紀要』第四号、二一年、七年)。
- (12) 『士林浜廻』(三)(『名古屋叢書続編』第一九巻)、図録『旗本がみた忠臣蔵 若狭野浅野家三千石の軌跡』(東京都江戸東京博物館、二一年)。
- (13) 『鸚鵡籠中記』 一四(徳川林政史研究所蔵)。
- (14) 『公边御日記』 元禄十六年二月七日条。
- (15) 『公边御日記』 元禄十六年二月二十三日条。
- (16) 平井誠二『吉良上野介と赤穂事件』(高埜利彦編『日本の時代史 元禄の社会と文化』第一五巻、吉川弘文館、二一年)。

三年)。

(17) 徳川林政史研究所蔵「石河家文書」。

(18) 神沢社口「翁草」(『日本随筆大成』第三期、第二巻所収、吉川弘文館、二七年)、「営中刃傷記」(『新燕石十種』第四巻、中央公論新社、一九八一年)、藤田覚『田沼意次』(ミネルヴァ書房、二〇〇七年) 参照。

(19) 「天明四年辰三月廿四日、於殿中新御番佐野善左衛門致乱心、若年寄田沼山城守殿^江手疵為負候右始末之書拔」(徳川林政史研究所蔵「石河家文書」)。以下「始末之書拔」と略す。

(20) 「始末之書拔」。

(21) 前掲拙稿「尾張藩における幕藩間交渉と城附・「取持」参照。

(22) 「始末之書拔」。

(23) 「始末之書拔」。なお、佐野善左衛門の殿中刃傷は、遺恨によるところが大きかったが、「乱心」として切腹を命じるといふ形をとった。若年寄田沼意知は、乱心による予想外の行動に巻き込まれて死亡したために、乱心した者を切腹させれば、殺害された方の面子も立ち、両家の関係者にまで事件に対する処罰が及ばずに処理することができたのである。こうした幕府の措置は、赤穂事件が教訓となっており、それ以降、殿中刃傷事件は乱心によるものとされ、相手が死去した場合、善悪を判断せずに切腹を命じるといふ慣行ができていた

(山本博文『切腹』、光文社新書、二〇〇三年参照)。

(24) 「営中刃傷記」。

(25) 小寺玉晁「江戸見草」(『鼠璞十種』第二、国書刊行会、九一六年)。

(26) 「始末之書拔」。

(27) 「始末之書拔」。

(28) 「始末之書拔」。

(文学部准教授)